令和７年度　第１回桐生市青少年問題協議会　結果報告

日　時：令和７年７月１０日（木）１０：００～１１：４０

場　所：青年の家　講堂

出席者：荒木恵司、辻正男、小島強、中村清、青柳尚志、松島宏明、青柳明美、村井正典、
阿久津泰、諏訪淳一、常見武司、白﨑あつ子、青木講一、金子公江、橋本繁栄、
遠藤綾人、馬場仁、髙松富雄、
糸井広江、荻野剛朗（教育環境課教育支援係）
須藤まりこ、星野正史、金子秀明、関真克、新井礼子、関口宏高、木村裕一、
岡戸隆也、山越達哉

＜全体会＞

１　開　会　　　　司会：星野課長

２　委嘱状伝達　　荒木市長から委員に委嘱状が渡された。（代表：辻委員）

３　挨　拶　　　　荒木市長

４　自己紹介　　　別紙名簿順に委員が自己紹介（辻委員～髙松委員、教育環境課）
委員自己紹介後、事務局も自己紹介。

５　報　告

桐生市いじめ防止対策について　　　　　・・・・糸井教育環境課長、荻野教育支援係長

資料１頁～４頁について、荻野教育支援係長が報告した。

６　協　議　　　　＜議長：荒木市長＞

（１）青少年問題協議会について　　　　・・・・説明：金子係長

資料２頁～４頁を基に金子係長が説明した。

（２）専門部会長の選出　　　　　　　　・・・・提案：金子係長

（事務局案）：子ども対策部会
松島宏明委員を部会長、馬場仁委員を副部会長
家庭・地域対策部会
青柳明美委員を部会長、青木講一委員を副部会長

＜事務局案が承認＞

（3）第３９回桐生市「明るい家庭・地域づくり運動」推進市民大会について
資料５頁～９頁を基に説明。　　　　　　　　　　　　　・・・・説明：関口主査

７　その他
（1）令和７年度「青少年の被害・非行防止全国強調月間」と「夏の青少年健全育成運動」について　　資料１０頁～１８頁を基に説明。　　　　　・・・・説明：関口主査
（2）桐生市青少年ネット見守り活動委員会について
資料１９頁～２４頁を基に説明。　　　　・・・・説明・報告：岡戸指導員

８　閉　会　　　　　司会：星野課長

＜専門部会＞１０：４５～１１：３０

<u>子ども対策部会（４号室）</u>

１　開　会　　司会：星野課長

２　挨　拶　　　松島部会長（青少愛会長）、馬場副部会長（子育連会長）

３　協　議　　＜議長：松島部会長＞

委員：２年間で４回の会議。青少年の問題を考える協議会である。テーマをいくつか考えて、それぞれの部会で協議していく。近年、子どもを取り巻く環境がかなり変化してきている。特に、コロナ禍以降がらりと変化した。時代の変化とともに協議会の在り方も変わっていくべきであるが。以前は会議結果を答申という形でまとめていたが、近年はポスターやチラシを作成するなどわかりやすい方法を考えている。本日は１回目ということで、皆さんに自由に意見を出してもらって議論できればと考えている。まずは、自分が考える「子どもの変化」について考えを聞きたいと思う。

委員：不登校の子どもが増えている。全欠の生徒もいるが、来たり来なかったりという生徒が増えてきている。変化の背景には学校だけが学びの場ではないという考えが浸透してきていることがあると思う。学校としては体験活動など学校の中でしか学べないものがあるということを特色として示していければと考えている。

委員：子どものことで考えるのは携帯をいつ与えるかということ。周りの子どもを見ると

持っている子が多く、スマホを持っている者同士が仲良くなり、そうでない子は輪に入りにくいという状況があるようだ。先日、群馬セーフネットによる情報モラル講習に参加したが、自分から何かを発信する時には特に注意が必要だという話を聞いた。子どもについて気になるのは携帯・スマホについてである。

委員：高校生もだいぶ変わった。具体的には年々おとなしくなってきている。物分かりがいい反面幼い。また、その個人差がとても大きいように思う。以前はざわざわしていた全校集会も生徒会の進行でさっと静かになる。授業中は寝てしまう子もいるけれど、与えられたことを素直にこなそうとする。しかし、おとなしいからなのか、わからないことを質問することができなかったり、わからないことを自分で調べたりそれでもわからなければ聞くという事ができない生徒が多い。コロナ禍の影響もあるのか、本来、小学校や中学校で経験しているべきことの多くが未経験で高校生になっているという印象を受ける。

委員：子どもの実態が変わったことによって、先生の指導の仕方も以前は怒鳴るような指導が多く見られたが、今は優しく諭すような感じに変わっていた。生徒も素直に言うことを聞くが、裏では何を考えているかわからない。最近の先生を見て思うのは何かトラブルが起きた時に自分で解決するよりもすぐにスクールカウンセラーや児童相談所などに頼ってしまうことが気になる。外部機関と連携することはもちろん大切であるが、もう少し、自分で何とかしようと考えてほしい。また、家庭の教育力低下も感じていて、様々なことを学校に丸投げしているように感じることがある。しかしながら、この地区は、学校と地域が連携してコミュニティを守っていこうという意識が高い。それを強みとして、より良い学校を作っていきたい。

委員：先日、孫を車で送り迎えをしていて、知っている子が歩いて下校していたので、「乗せていってあげよう」と孫に言ったら「知らない大人が声をかけてはいけない」と孫に注意された。これも時代の変化かなと思う。まもなく夏休みになるが、相生小・天沼小それぞれの学童クラブで、相生小は１００人、天沼小は１２０人いるが、天沼小は夏休みに４５人増で１６５人。全校児童の半数が学童クラブに行っているという計算になる。指導員がとても足らない。

委員：今年度、小学校の体育館にスポットクーラーが入った。視察で見てきていたが、音の割に効果は小さい。しかし、ないよりはましだという印象。また、近年共働きの家が多いということから、保護者が出勤する時間に学校の門が開いていないので困るという声が聞こえてくる。また、学校の適正配置の問題では、小学校が絞られてくると、学童はどうなるのかという不安の声が聞こえてくる。適正配置はこの点についても考えながら決めていかないといけない。

委員：育成会でしかできないことがあると考えて活動している。しかし、コロナ辺りから学校との距離ができてしまったように感じる。保護者の様子も変わってきて、活動に協力はしないが、クレームは言うというような状況が多くみられるので、その部分へのケアも必要と考える。子どもの変化としては大人の顔色を見て動く「良い子」が増えている。一方で地域の子どもにあいさつをしても無視されるようなこともある。学校や子育連など多くの大人が関わることが大切だと考えている。

委員：この先の２年間・４年間を見据えた場合に桐生市に焦点を合わせて協議をするわけだから適正配置の問題は避けて通ることはできない。高校の合併はすでに進み、小中学校も令和１０年４月１日にはスタートしていくわけで、様々な体制を整えていかないと対応は遅れてしまう。青少愛も旧中学校区のままであるが、旧市内が１・２校になった場合はどうしていくのか。地区をまとめることも考えていくべき。子育連はどういう状況か。

委員：休止している地区もある。学校の適正配置に従って再編していかざるを得ないと考えている。

委員：ボーイスカウトも苦労していると聞く。子どもは良い子が増えているが、対人関係は難しく、良かれと思ってやったことがいじめになってしまうような状況も聞く。高校ではどう対応しているか。

委員：いじめの把握は難しい。２者面談やいじめアンケート等で情報を得て、その生徒が信頼している教師や養護教諭が話を詳しく聞いていく。

委員：先生が外部に助けを求めたがるという話があったが、最近のことか。

委員：以前から制度としてはあったが、最近、より気軽に助けを求めている印象がある。「まずは、保護者と丁寧に連絡を取って」というような場面でも、「外部につないでください」などという先生が増えたように感じている。教員も変化してきたように思う。

委員：変わってきた部分もあると思う。

委員：スクールカウンセラーにつなぐのも簡単ではなくて、本人や保護者がそれを全く希望しないケースもある。年間のスクールカウンセラーの来校予定もあるので、なかなか運用が進まないところもある。

委員：でも、学校はまだそうやって組織的に対応できる部分もあるが、子育連などはそうもいかないのでは。

委員：問題が発生しても、本人は正しいと思い込んでいることが多い。今までは考えられなかったような様々な価値観が出てきている。先生方が外部機関へ助けを求めるのは、そうしないと自分自身が守れないというのもあるのではないか。

委員：様々な問題を解決していくという視点から考えると、コロナ以降、学校と地域が繋がりにくくなってきている。会合自体の数が減り顔が繋がらない。これも問題では。

委員：地区の小学校では昨年からＰＴＡの歓送迎会が再開し、その中では情報交換ができた。

委員：今回出た話を、それぞれの団体に持ち帰って検討したり、また次回の会議で議論を深めていくことができればと思う。

家庭・地域対策部会（２号室）

１　開　会　　司会：金子係長

２　挨　拶　青柳部会長（青少愛副会長）、青木副部会長（補導連会長）

３　協　議　　＜議長：青柳部会長＞

委員：　それぞれの団体で現在抱えている、悩み・問題等の話を聞いていければと思う。

委員：ボーイスカウトではかつて県全体で５０００人いて、桐生市だけで２０００人いた。現在は群馬全体でも１０００人を切った。桐生市は１５０～１６０人。より良い社会人を育成するべく集団による学びを重視しているわけであるが、大勢による学びの場が失われてきている。集団ではなく個の世界で生きている子どもが多いような気がしてならない。コミュニケーションが失われてきている中で、陰湿ないじめなどが増えてきたように感じている。いわゆるケンカなども含めて子ども同士の学びの場を作っていくことがわれわれ大人の使命なのではないかと思っている。

委員：職警連は９０社弱の企業で構成されている。職場から代表者を出して補導などを行っている。最近は補導などを行っていても、ほとんど子どもたちが出歩いているこ

とはない。企業内ではハラスメントの問題が挙げられることが多い。相手の気持ちを考えたコミュニケーションというのは大人も子どもも共通の課題なのではないかと感じる。

委員：養育力のない親が増えているということを感じる。例えばこども食堂で、複数の学校の児童・生徒が関わる場面があり、そこでトラブルが起きた時に学校外のことなので、学校では解決できないというか、そもそも問題として扱われないことが多いと聞く（トラブルの当事者の親同士で解決できない)。周りが当事者の親に問題を指摘しても「周りが悪いから自分の子どもが問題を起こす」などと言って、自らを省みることができない。そんな環境で育った子どもは本当にかわいそうなので、何とかできないものかと思っている。

委員：先日、ある中学校で社明運動の大会に参加してきた。子どもたちは良い子が多かったが、不登校が予備軍も含めて１割程度いると聞いて、大変なことだと感じた。多くは家庭環境に問題を抱えている生徒が多いようで、そこが一番大事なのでは。また、コミュニケーション力が未熟であるということも大きく影響しているのではと思っている。

委員：安心・安全な居場所をなくしている子どもが大変多い。学校ではいじめや学力不振で不登校になってしまったり、家庭では親に理不尽に怒鳴られる。あるいは両親がいつもけんかしているなど、安心できる場所がない子が多いように感じる。そこで子どもたちはＳＮＳやオンラインゲームなどに居場所を求めてしまう。家にいたくないと思った子どもが家出をした時に、不特定多数の人とつながり、トラブルに巻き込まれることも増えている。先日、ＳＮＳで「家にいたくない」と発信した子どものもとに、関西に住む大人から返信があり、「じゃあ、こっちに来ちゃいなよ」ということで、夜行バスのチケットまで送ってきて、子どもはそれを使って関西へ向かってしまうといったことも起きている。これは、ほんの一例で、こういったことはたくさん起きている。子どもが安心して過ごせる場所の必要性を強く感じている。

委員：今年度、本校の学区では不審者の報告が多く出ている。その時に児童が「こども安全協力の家」に逃げ込んで助けてもらっているという事例が多くある。４月に学校と自宅の間の「協力の家」を確認させたこともあるが、地域とのつながりの大切さを強く感じている。また、先ほど養育力という話題もあったが、２件心当たりのある事案が起きている。共通しているのは、親は「自分の子どもが言っていることが一番」で学校が丁寧に聞き取りをして分かった事実など関係ないという対応になってしまうということ。保護者の方に説明をするときも「現在では、こういったトラブルの時には、このように対応させてもらっています」とか「まずは現在の状況を理解していただいて・・・」というところから丁寧に説明をしていくがわかっても

らえないことが多い。また、「訴える」的な話が増えてきたように感じる。例えば、ある児童が、他の児童を泣かしてしまった時に、周りの児童が「いけないんだ、いけないんだ」などとはやしたてたことがトラウマになってしまい学校に行けなくなったということが起きた時に、周りの児童に適切に指導しなかった担任が悪いなどと言ってきた。その児童は現在フリースクールに通っていて、親の気持ちも落ち着いてきたが、この１件のように何かトラブルが起きた時に、大局を見て物事を解決していくという視点が不足していたり、責任を学校や他者に向ける傾向が強い。今回は、「子どもにとって何がプラスか」ということを第一に考えて対応していくことで治まったが、昔のように「お互いにごめんなさいをして、明日から普通にやっていこう」というような話になるのは難しくなっている。

委員：これまでの話を聞いていて、何か集団でトラブルが起きた時に大局な視点で対応していくことが一番大切だと感じた。その中でも、養育力というキーワードが出たが、親に対する教育というか支援も必要なのだと感じた。

委員：養育力のない親とその子どもがこども食堂で起こしたトラブルについての話があったが、そういう話が子どもすこやか部の方に報告されることはあるのか。

委員：こども食堂から直接子育て相談課に連絡が入ることはないが、学校から連絡が入ることはある。聞いている話の中で感じるのは母親が心を病んでいるケースが多いように思う。その場合では子育て相談課による見守りを行っているが、情報がないと難しい。

委員：こども食堂は対応が全くなく野放図というところが多いような印象を受けている。学校間をまたいだトラブルの時に、相談を受けて対応をしたことがあるが、話の中でちょっとした言葉尻をとらえて「じゃあこっちがすべて悪いんですか」などと言ってきて話にならないことが多い。

委員：こちらも相談の電話がかかってくれば対応をするが、その時に感じるのは保護者の方にこちらの言葉を受け入れるだけの心のゆとりがまったくないということ。

委員：こども食堂の担当部署ってどこですか？

委員：子育て相談課から補助を出しているところはあるが、すべて自主運営ということになっているので、活動内容に指導をするというようなことはない。

委員：ここまでの話から子どもの居場所がないということが問題の根底にありそうである。児童相談所の方には何か相談等があったりしますか。

委員：最近感じるのは、親に余裕がないということ。自分が責任を負うということを回避したいという意志を強く感じる。かつて、トラブルがあった時に「お互い悪かったよね」という感じで丸く収まっていた話も今は、どちらかに１００％責任を押し付けないと納得がいかないというような状況がある。いい意味で余裕のある人間関係ができればと思う。

委員：相談の手を差し伸べても、心を開いてもらえないということがよくあるようである。そういったご家庭は心の余裕を失っている場合が多いようである。

委員：そういった状況があるので、私は日ごろからのコミュニケーションを特に重視している。保護者と日常のあいさつや会話を積極的にするようにしている。学校で何かトラブルが発生した時には、その日々のコミュニケーションが生きることが多い。学校は子どもを育てる場所だから、本来は失敗をしてもいい場所。失敗をしたら、振り返りをして、何が悪かったか理解して成長していくもの。周りの大人は失敗を繰り返す子どもに対して根気強く、働きかけて成長を促していくという姿勢が必要なのだと思う。

委員：安全の家が有効活用されたという話もあったが、年々数が減っていると聞く。青少年課でも状況を確認しながら、協力を促せると良いのでは。

委員：年に一度ＰＴＡに協力をいただきながら、新規も含めてお願いをしているが、高齢化などの問題もあり、数を減らしている。今後も粘り強く協力を呼び掛けていく。

委員：１割の生徒が不登校という話もあったが。

委員：学校を休むことに対して抵抗のない生徒や保護者が増えているのは感じる。

委員：桐生市のいじめ防止対策の１ページに、すべての学校にスクールカウンセラーを配置とあるが、利用の実態を知りたいと思う。

委員：本校の不登校の児童の中にはスクールカウンセラーのカウンセリングを受けている児童もいるが、昨年度からは県の総合教育センターの方でやっている「つなサポ」を利用する児童もいる。これは仮想空間（メタバース）でアバター同士で交流や授業を行うものであるが、これにハマっている児童もいる。それぞれの児童によって対応の正解が異なるが、子どもの居場所を周りの大人が真剣に考えることがいろいろな選択肢の中から考えていければ。そんなところから親の負担も減らしていければ。

委員：「つなサポ」というのはどのように紹介すればいいのか。

委員：ネット環境があればどこでもできる。県の教育センターに問い合わせると、担当者が来て、細かい説明をしてくれる。

委員：夏休みに入り、給食がなくなると食事の機会を失ってしまう子どもが出てくる。学校で簡単な食事を提供することはできないか。学校ならば、受け取る時に子どもたちが劣等感を感じることがなくて良い。必要な児童はそれほど多くないが、何とかならないかと思う。

委員：学校だけで対応することはもちろん不可能であるが、そういった状況があることを、この場で情報交換することだけでも意義のあることだと思う。

委員：補導をやっていて常日頃思うのは、子どもの指導より親の指導をした方が良いということ。養育力がない保護者に対して再教育というのはできないものか。子どもについて思うのは辛抱がないということ。私は以前、ボーイスカウトの経験があるが、こういった自然体験で育った子に悪い子はいない。親同士の接点という意味でも、ボーイスカウトの活動にはとても意味があったと思っている。今日、学校の実態を話してくれたことは大変ありがたかった。いろいろ
な立場の人が情報を共有し、一緒に考えていくことが大切であると感じています。

委員:様々な意見をいただいた。両親の生きざまを見ながら子どもたちは成長していく。では、どんな対策をとっていけば良いのか考えていくことが必要。

４　閉　会　　司会：金子係長